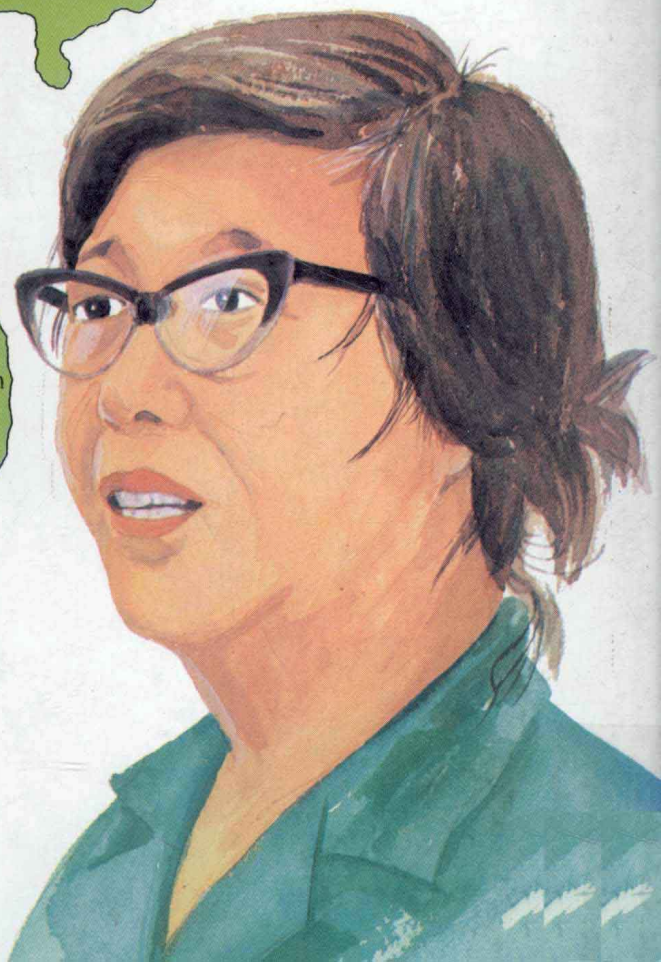


内藤泰子

カンボジア わが愛

生と死の1500日



カンボジア わが愛 生と死の1500日

昭和54年10月1日 第1刷発行

昭和54年11月10日 第1刷発行

定価 850円

〈検印廃止〉 著 者 内 藤 泰 子

発 行 者 藤根井 和夫

印刷・製本 凸 版 印 刷

発 行 所 日本放送出版協会

150 東京都渋谷区宇田川町41-1

振替 東京 1-49701

乱丁・落丁本はお取替します

内藤泰子

カンボジア わが愛

生と死の二五〇〇日

©1979 Yasuko Naito

カバー・口絵デザイン 安彦デザイン事務所：柿崎 寿

中扉・章扉・地図 スタジオACE

写真 共同通信社（口絵3切込み）NHK（その他）

編集協力 小林恒夫



1979年6月17日、私は救出されボ
チェント空港に着いた。夫と子供
たちの遺髪が入った布袋がすべ
てだった。飢えと虐殺の恐怖にさ
まよった1500日は終わった。





73年、一家そろっての写真。夫、私。トーモリ(前列右)、トニー(前列左)、トミー(後列左)、ティニー(後列中)、チャナリー(後列右)。



(No. 1000000000)

内務省

昭和二十一年四月
本籍地 東京市文京区千代田
現在地 東京市文京区千代田

現在地 東京市文京区千代田
現在地 東京市文京区千代田

現在地 東京市文京区千代田
現在地 東京市文京区千代田

現在地 東京市文京区千代田
現在地 東京市文京区千代田

現在地 東京市文京区千代田
現在地 東京市文京区千代田

現在地 東京市文京区千代田
現在地 東京市文京区千代田

現在地 東京市文京区千代田
現在地 東京市文京区千代田

現在地 東京市文京区千代田
現在地 東京市文京区千代田

現在地 東京市文京区千代田
現在地 東京市文京区千代田

現在地 東京市文京区千代田
現在地 東京市文京区千代田

現在地 東京市文京区千代田
現在地 東京市文京区千代田

現在地 東京市文京区千代田
現在地 東京市文京区千代田

現在地 東京市文京区千代田
現在地 東京市文京区千代田

79年5月9日、一緒に逃げたクーリエンにメモを託す。このメモにより私は救出された。



ブノンベン¹の我が家は荒されきっていた。4年間の空白で何もかも変わってしまった。



途中まで一緒だった家里容子さんの家を見る。見おろす市街に昔のにぎわいはない



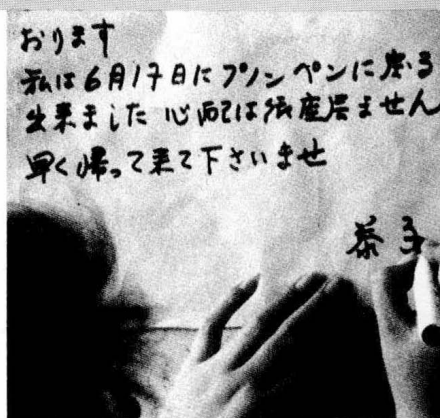
部屋の中を探しまわった。死んだ長男トーマリの目ざまし時計の破片が……。



容子さん宛に、NHK取材班の人と一緒に絡用のメモを書き、壁にはりつけた。



夫のポーランド代理大使時代に買ったシャンデリアが、二階に壊れて吊り下っていた。



容子さんと別れた時、容子さんはかなり泣いていた。どうぞ無事でいて下さい。

カンボジア わが愛 生と死の一五〇日 目次

私一人が生き残った

15

I これが地獄か 1975 (昭和五〇)年4月～9月

19

黒いカラスがやってきた 21

生きていればまた会える 27

ミッチャン亡くなる 31

食事で険悪な雰囲気 34

野ネズミはおいしい 39

優しいトニーも亡くなる 43

ティニーも髪を切って逝く 48

容子さんとも別れて大移動 53

II オオカミが泣く夜 1975 (昭和五〇)年10月～76年4月

59

遙か北西のジャングル 61

パパまで私を置いて…… 66

体のなかを風が吹く 70

村の人は親切だったが 76
自分の意志で移動組に 82

Ⅲ タイ国境の村 1976(昭和五二)年4月～77年5月 89

赤旗と「どん底」の家 91

異変のきざしか? 96

下痢とオデキで衰弱 101

働かざるもの食うべからず 106

ここでも結婚話とは! 111

占いは「日本へ帰れる」 118

Ⅳ 飢えと不安のなかで 1977(昭和五二)年6月～78年4月 123

夜、夢をみるのは自由 125

「七八年は一日三食になる…」? 130

もう少しの我慢だ 136

「畑に近づいたものは殺す」 141

恋の逆恨みで頭を丸める 147

三年が過ぎた 152

V たった一つの出口 1978 (昭和五三)年6月～79年6月

処刑の夜、そして養女ラン 159

パパが指示する方角へ 164

あの一枚の写真 170

帰国して二か月

これからが第二の人生

179

付 内藤泰子救出記 (NHK取材班・島村矩生) 183

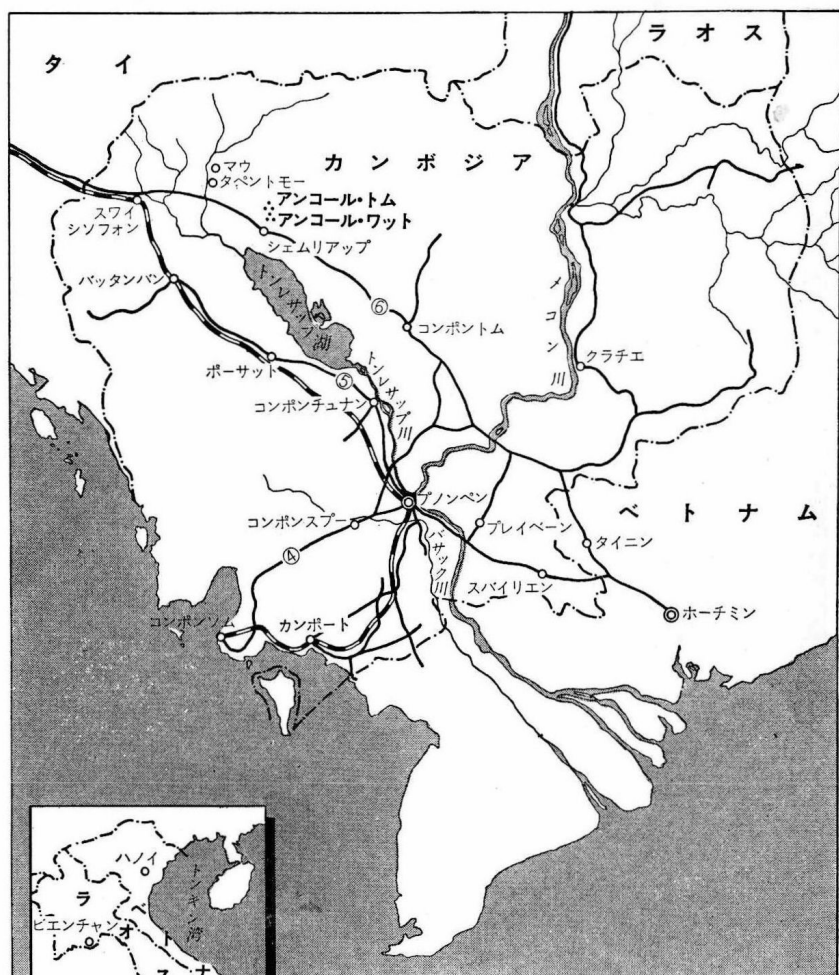
脚註解説 (同・桑江勝己)

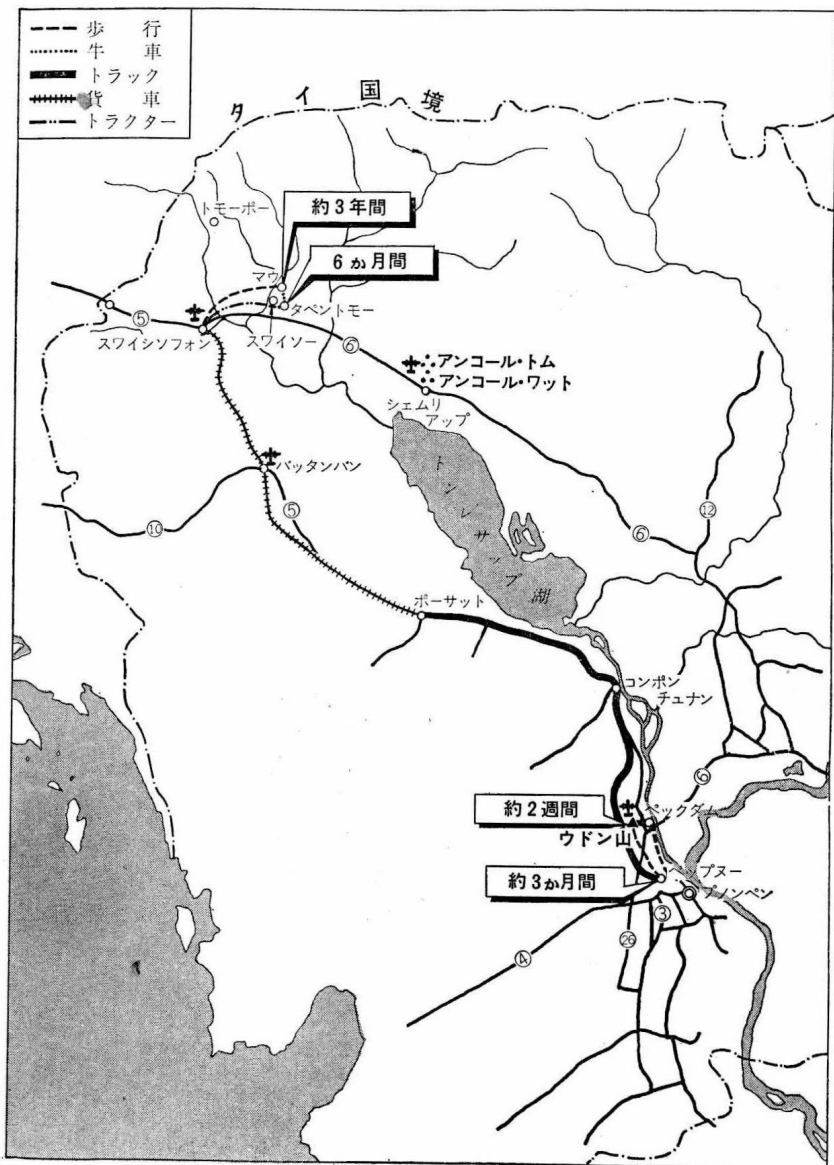
スケッチ 内藤泰子

157

カンボジア●わが愛

——生と死の一五〇〇日——





私一人が生き残った

ブノンベンへ向かうヘリコプターに、いま私は乗っている。とうとう私は日本へ帰れるのだ。長い長い四年間だった。なぜ私がこんな苦しみを味わわねばならないのかと、どれほど天を呪ったことか。そして、一日も早く日本へ帰してくださいと幾度神に祈ったことか。それもこれも、お前がカンボジアを選んだからではないかと言われれば、答える術はない。しかし、なぜ、なぜ……。私にはわからない。

アンコール・ワットの荘厳な塔がすぐ下に見える。あの高いところに登ったのは、一九六〇年。夫が駐日カンボジア大使館勤務から本国勤務にかわった初夏。東京で私たちが結婚して五年目。彼の先妻の三人の子供、十一歳のチャナリー、九歳のティニー、五歳のトミーに私たちの最初の息子トーモリが落着いたブノンベンは平和そのものだった。あの塔の上で私は目まいを起こし、夫の胸